

「幼小いっしょに！のとまり会」

1 趣 旨

- ・年長児と小学1・2年生が親元を離れ、自分の力で生活する場を提供する。これにより、一人ひとりが自分のできることを積み上げて体験の幅を広げるとともに、子供の自己肯定感を高める。また、年長児と小学1・2年生が共に活動する機会を設定することにより、異学年間のかかわりが生まれるプログラムを精査し「小1プロブレム」に寄与する。
- ・保護者にとっては、子育てについて学んだり、保護者同士が情報交換を行ったりすることにより、子育てについて自信をもつ機会とする。また、保護者同士のつながりを構築する場とする。

2 ねらい

- ・異年齢集団による生活体験活動をとおして、低年齢期の子供たちが体験活動の楽しさを感じるとともに、集団行動や人とのかかわり方のルール等に気付く。
- ・保護者が活動を通して学び、自らの子育てについて振り返る。また、保護者同士がかかわりをもち、子育てに対して思いを深める。

3 日 程

- (1) 期 日 第1回 平成27年9月6日(日) 日帰り
第2回 平成27年9月12日(土)～13日(日) 1泊2日
- (2) 参加者 第1回 75名(子ども39名, 保護者他36名) ※募集 子供40名とその保護者
第2回 39名(子ども39名) ※募集 子供40名
- (3) 研修内容及び講師

(○…子供プログラム, ◎…親子プログラム, □…親プログラム)

第1回(日帰り)	第2回(テント1泊2日)	
【午前】 ○フードハンターゲーム ○昼食(食堂の使い方・マナー) □トークセッション 講師: 沼田直子氏 (南加賀保健福祉センター所長) □昼食		【午前】 ○テント撤収 ○朝食 ○フィールドビンゴ ○カートドッグ作り
【午後】 ◎ホットケーキ作り ○振り返り		【午後】 ◎おとまり準備 ○砂遊び ○夕食, 入浴 ○テント泊



〈保護者同士の交流〉



〈フードハンターゲーム〉



〈海岸での砂遊び〉



〈カートドッグ作り〉

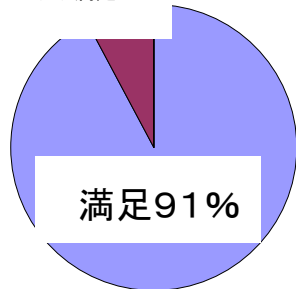
4 成果と課題

(1) 成果

事業評価を目的とし、参加者(子供)39名、参加者(保護者)36名を対象に調査を実施した。年長児の調査は、保護者の聞き取りによって行った。

① 参加者の評価 (アンケートより)

事業に対する満足度
やや満足9%



<楽しかったこと>

テントでおとまり	12人
すな遊び	7人
ごはんを食べた・お風呂に入った	6人
フィールドビンゴ	5人
カートンドッグ作り	2人
みんなと遊んだ	2人

<がんばったこと>

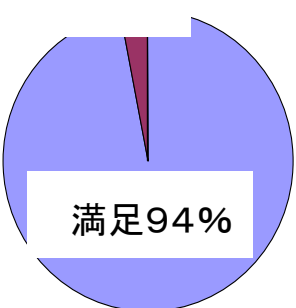
カートンドッグ作り	11人
テント片付け	9人
砂像造り	7人
話を聞くこと	2人

その他

- ・自分でご飯を盛り付けた
- ・おかあさんに会いたいと言わなかった
- ・おしっこをもらさなかった
- ・みんなで協力した
- ・小さい子の面倒を見た

② 保護者の評価 (アンケートより)

事業に対する満足度
やや満足6%



<自由記述より>

- ・トークセッションでの講演を聴いたり、他の保護者の方の話を聞いたりすると、悩みが大差もなく、同じ思いをもって子育てをしていることが分かって励みになった。
- ・幼い子供たちを1泊預かっていただくことはすごいこと。子供ことでの挑戦は、成長につながると思う。
- ・子供が一人でも意外と平気で、自分で何でもしようとしている姿に驚いた。
- ・幼児にとっては親子でイベントに参加することが多い中、親子が離れてのプログラムはとても良いと感じた。
- ・終わりの会で、子供たちの2日間の様子をスライドで見ることができ、成長を感じた。

③ 考察

- ・低年齢期の子供にとって、「楽しかった」「がんばった」と思える活動、小学生と幼児がかかわり合うような活動を設定することにより、異年齢同士で協力し合ったり、小学生が幼児の手本となったりする姿が見られた。
- ・年長児、小学生、男女が混合する6～7名でグループ構成したことにより、グループのお世話をする小学生、小学生の言うことを聞いてルールを守ったり、がまんしたりする年長児の姿が見られた。
- ・参加者が、1回目、2回目で継続して参加するようにしたことや、2回目の宿泊プログラムでは、保護者と離れて活動を行うことを重視したことにより、子供同士の友達関係がより深く築かれ、かかわり合う力を育てることができた。
- ・保護者同士がかかわれるプログラムを設定することにより、保護者の子育てについての考えを共有し合う場を提供することができた。
- ・ボランティアスタッフにとって、泊を伴って幼児とかかわる体験は、普段の授業では得られない経験である。「2日目になると、小学生が年下の子の手本となれるような行動ができるようになってきた」「子供たちだけでできることが増えてきて感動した」といった感想が聞かれるなど、学生にとって有意義な研修の機会を提供することができた。

(2) 課題

- ・参加者に対して、ボランティアスタッフの人数が不足していた。幼児教育系学生のボランティアを計画的に確保し、事業の円滑な運営や、学生の力量を高める場として広めていきたい。
- ・ボランティアスタッフとのミーティングや事前体験の場を充実させるなど、体験活動への支援の仕方について研修する機会を設ける必要がある。